

松谷会長記者会見の概要

日 時：令和 5 年 3 月 13 日（月） 15 時 00 分～15 時 30 分

場 所：東京証券取引所ビル地下 1 階 兜倶楽部

記者：

公募投信(全体、公募株式投信、公募株式投信(除く ETF)いずれも)の純資産総額の残高が過去最高を更新したことについて、改めて松谷会長のご認識を伺いたい。

松谷会長：

前回、過去最高を記録した 2021 年 12 月以降の純資産増減額の内訳をまず説明させていただく。

川本統計情報室長：

純資産増減額の内訳について、公募株式投信(除く ETF)では、2022 年 1 月以降、2023 年 2 月までの累計で資金増減額は 9.3 兆円の増加、分配金の支払いは 2.2 兆円、運用増減額は 6.2 兆円の減少であった。運用の減少と分配金の支払いを合算した減少額(約 8.4 兆円)を上回る資金の増加により、今回、純資産総額が過去最高を更新した。

松谷会長：

純資産総額は月々の市況の変化による運用増減額の影響を受けるため、当会では継続的に資金が流入しているかをより重要視している。現在、資金流入額は堅調に推移しており、ファンドからの分配金の支払いや運用リターンマイナスを上回る資金流入の増加が純資産総額の過去最高を更新した要因と考えられ、意味のある結果と捉えている。2023 年 2 月は市況が回復したことも純資産総額の増加につながったと思うが、市況の伸びによるものではなく、投資家からの資金の流入によって、過去最高を更新したことに意味があり、徐々に資産形成が浸透してきたことの証左ではないかと考える。

記者：

シリコンバレー銀行(SVB)の破綻が投資信託の資金の動きに何か影響を及ぼすだろうか。

松谷会長：

リーマン・ショックでは、破綻の影響が金融システム全体へ波及し、影響が大きくなったが、シリコンバレー銀行(SVB)の破綻は、現時点ではリーマン・ショックほどの規模ではない印象を受ける。事態の推移を注視する必要があると考えるが、足下は特に、大きな影響は見受けられない。これまでも一時的な混乱は見られたものの、例えば、リーマン・ショックが起こった際にも、慌てずに投資を継続した人が大きなリターンを得たという経験則を獲得した。資産形成は今日明日の利益のためではなく、10 年 20 年先を見据えて長期的な目線で行うものであり、その過程で市況が悪化することも起こりうることを念頭に置きながら、慌てずに、投資を継続することが重要であると考えている。一部には売却される方もいらっしゃると思うが、大宗は落ち着いて、投資を継続していただけるのではないかと思う。

以上